

老年者とストレス

旭川医科大学第三内科

並木正義

世はまさにストレス時代といってよく、さまざまなストレスが人間を脅かしている。

特に心理的・精神的ストレスは各種疾患の発症や経過に大きな影響をもたらすことが少なくない。これは当然老年者についても言える。一般的にストレスの関連がとりわけ密接な疾患をストレス関連疾患（ストレス病）と称しているが、その主なものは心身症、神経症、うつ（うつ病およびうつ状態）である。

この中からいくつかの具体的問題を取り上げ、老年者ゆえに留意しなければならない点、また参考事項をあげてみたい。

心身症の代表的疾患といわれる消化性潰瘍について、35年間にわたる老年者潰瘍の調査をもとに参考になる事柄を指摘する。特に何度も再発を繰り返し長い経過をたどっている潰瘍症患者の実態と、その再発における精神的ストレスのかかわりについてふれ、それゆえに治療において、全人的アプローチがいかに重要な意味をもつかを示す。

そのほか心身症的色彩の強い過敏性腸症候群の患者を30年以上経過をみていると、病態や症状において、どのような変化を来すか、それは加齢とストレス耐性の関連を考えるうえに一つの示唆を与えるものであることなどについてもふれる。また、注意していると最近めずらしくない老年者（女性に多い）の神経性腹部膨満症についても実例を示して論じたい。

老年者には、さまざまな不安がつきまとう。この不安が臨床の実際がいかに反映され、どういう病態を引き起こしているか、さらに老年者のうつの実態と参考事項についてもストレスとの関連において述べる。

最後にストレスと加齢の病態生理に関する免疫神経内分泌学的研究の一端をも示してみたい。

第18回日本老年学会総会シンポジウム「老年学研究の動向と今後」

司会のことば

第18回日本老年学会総会会長

並木正義

第18回日本老年学会総会を開催するにあたり、「老年学研究の動向と今後」と題するシンポジウムを取り上げ、4人の分科会の会長にシンポジストになっていただいた。こういう企画はおそらく初めてであろう。豪華な顔触れである。

老年学に関するそれぞれの分野における研究動向と、今後のあり方、目指す点などが示され、実り多いシンポジウムになるものと大いに期待している。

第18回日本老年学会総会シンポジウム「老年学研究の動向と今後」

1. 臨床医学の立場から

日本老年医学会会長

札幌医科大学医学部第2内科教授

飯村 攻

臨床医学の立場からみた老年学の動向の中で、最も著しい変化ないしは進展は、第1に疾病構造の変化とそれに連なる背景因子の変遷である。そして第2には、外科領域における手術適応の高齢化、あるいは高齢者への適応拡大、ということである。

ここでは、主に第1の点について述べさせていただく。疾病構造の変化は、既にしばしば指摘されてきたように、人口動態の急速な高齢化につれ、いわゆる成人・老人病への傾倒現象が、当然のこととして発現している。しかし、より詳細な内容は、単に高齢人口の増加という事由にとどまらない。生活環境の変化、医療対策、診断技術の進歩、高度治療の影響等が複雑に入り混じっての効果となって現われている。本邦における痴呆の成因、脳卒中の病態の変化、高齢者の消化器系疾患、無症候性心筋虚血、血圧・心拍の日内変動、血圧調整の効果と降圧薬の選択など、幾つかの問題点の現状を紹介してみたい。

第18回日本老年学会総会シンポジウム「老年学研究の動向と今後」

2. 基礎医学の立場から

第17回日本基礎老化学会会長

東京都老人総合研究所副所長

佐藤昭夫

日本基礎老化学会は、昭和52年に設立された。老年学研究について基礎医学の立場から述べるにあたり、まず前半では当学会の老化研究の流れを紹介したい。当学会では、発表演題数が年々増加の傾向にあり、設立当初は約30件であったが、昨年度（第16回大会）には約70件にも及ぶ演題が発表された。当学会では、老化のメカニズムを分子、細胞、組織、器官、個体、及び集団のレベルで、老化にかかわる遺伝子や環境因子、生体調節機構の加齢変化など様々な側面から追求した研究報告が行われてきている。例えば、細胞の分化・増殖に関わる栄養因子、活性酸素や食餌制限と老化との関わり、アミロイドなどの異常物質の生成のメカニズム、老化促進モデルマウス、脳機能や免疫機能の加齢変化などの研究が取り上げられてきた。

老化のメカニズムを追究する研究と並んで、老化研究をもとにこれまで未知であった生体機能の研究が発展する可能性もある。例えば、生理学の分野では、アルツハイマー病患者などに見られるミネルト核の神経細胞の変性からヒントを得て、その核に起始するコリン作動性神経の働きに関する研究が進んできている。後半では私自身の行ってきたそのような研究の動向についても述べてみたい。

第18回日本老年学会総会シンポジウム「老年学研究の動向と今後」

3. 歯科医学の立場から

第4回日本老年歯科医学会総会会長

平井敏博

日本老年歯科医学会の学術大会は、研究会から通算して今回が7回目となるが、一般講演の演題数は300を超え、その内容は疫学的調査、顎口腔系組織および機能の加齢変化、口腔状態と全身的健康状態、歯科受診行動に関する心理・社会的因子、在宅歯科診療、老年歯科学教育など、多岐にわたっている。

歯と歯根膜の喪失による咬合の破綻と歯根膜感覚の欠如は、咀嚼をはじめとする顎口腔系機能ばかりではなく、全身機能をも低下させ、また、顎関節・咀嚼筋症状を惹起することがある。現在、厚生省、日本歯科医師会、日本歯科医学会は「8020運動」を展開しているが、高齢者のQOLを確保するためには健全な咀嚼機能の維持とその管理が不可欠である。そして、これが歯科医学の中心的課題となり、社会生活の中でさらに重視されるようになると思われる。そのためにも、土台となる広領域にわたる基礎的研究と医療供給のための臨床的研究の一層の充実が望まれる。

第18回日本老年学会総会シンポジウム「老年学研究の動向と今後」

4. 心理学の立場から

第35回日本老年社会学会総会会長

杉山善朗

心理学の立場からみると、ここ3、4年の老年学研究は従来と異なって、衰退と適応障害の高齢者像から、精神的に健康で適応的な高齢者であるための要因の検討に変わってきた。この方向転換には、ひとは人生の後期から終末期にかけてもなお精神発達と成熟の可能性をもっているという、生涯発達心理学の視点(Erikson, E.H.)の影響が大きい。

以下に研究動向の変化を3つにまとめて展望すると、

第1は高齢者の適応に関連する諸要因の研究であり、生きがい・生活満足感・主観的幸福感を増強させる身体・心理・社会的条件についての研究、第2は高齢者のライフスタイルに影響する性別・生活形態(独居・同居)・役割機能・経済的自立・社会的活動・愛情や肯定のサポートの有無そしてパーソナリティ要因の研究、第3は死の過程における心理的援助に関する研究である。この他、老人性痴呆や性に関する心理学的研究も急務とされている。今後、長寿社会の到来が予測され高齢者が選択するライフスタイルもまた多様化するであろうから、高齢期を健康に迎え、過ごすための心理学的な援助ストラテジーと技法の確立が一そう重要となろう。